

近代ギリシャにおける『ヒポクラテス全集』の継承

菅野 幸子, 本田 克也

筑波大学人間総合科学研究科 法医学

受付：平成21年6月9日／受理：平成22年2月1日

要旨：本論文は、近代ギリシャの啓蒙期において『ヒポクラテス全集』がどのように継承されていったのかを、最近のギリシャ本国での医学史研究の一端を紹介しながら検討するものである。ギリシャではオスマントルコ支配下の時代は、古典研究全般が停滞していたものの、18世紀後半に独立の気運が高まるに連れて、祖先〔古代ギリシャ人〕の偉業を継承せんとする自覚が芽生え、医学史を含めた古典研究が活発化していった。当時のギリシャにおける学位論文や医学書からは、古代の遺産に医療実践の基本指針を求めつつ、近代ギリシャ医療の内実を深めようとした形跡が認められる。

キーワード：ヒポクラテス全集、近代ギリシャの啓蒙期、近代ギリシャ医療

本研究は、『ヒポクラテス全集』が近代ギリシャにおいてどのように継承されてきたのかを探る試みである。古代ギリシャの医療は、ローマ時代を経て中世にアラビア、西欧諸国へと継承され発展していったが、他方ギリシャ本国ではどのような経緯を辿ったのであろうか。この点については現在ギリシャにおいて、カラベロプウロス（アテネ大学医学史博士）を中心とした医学史研究家により精力的に研究が進められている¹⁾。ギリシャでの研究状況については、その論文の多くは現代ギリシャ語で発表されていることから、我が国ではその内実はまだほとんど知られていない。しかしながらその中にはきわめて興味深い研究が少なからず認められる。その主要な研究動向は、ギリシャの代表的な医学史雑誌 *ΔΕΛΤΟΣ* (*Deltos*, Φίλοι Μουσείου Ελληνικής Ιατρικής 刊行) 等において伺うことができる。本稿では、これら最近の諸研究をふまえて、18世紀後半から19世紀初頭におけるギリシャの医学界の状況を中心にみていく。まず本題に入る前に、ギリシャの歴史について簡単に振り返っておきたい。

1. 近代におけるギリシャ文化の再興と古代医学の継承

紀元前5世紀に発展したギリシャ医療は、ギリシャがローマ帝国の属州となって後、ローマに受け継がれ、ガレノスによって集大成された。さらにローマ帝国の東西分裂後、古代ギリシャ医学は西欧世界に継承される流れがあるが、他方で、東ローマ帝国（ビザンツ帝国）においては『ヒポクラテス全集』や『ガレノス全集』の写本伝承が絶えることなく脈々と続いていた。

1453年、オスマントルコの攻撃によってビザンツ帝国の首都コンスタンティノポリスが陥落し、以後、400年近くに亘ってギリシャはトルコ支配下に入り、受難の時代を生きることになる。このトルコ支配の時代（*τουρκοκρατία* トゥルククラティア）は、ギリシャではイスラムの社会制度や習慣に合わせた生活を送ることを余儀なくされることも多く²⁾、古代の遺産継承の動きは全般的にかなり停滞していたといわれる。

しかしながら18世紀になると、西欧ルネサンスの影響を受けつつ（いわばギリシャ文化の逆輸入である）、自分たちギリシャ人こそは古代ギリ

シヤの遺産の継承者であるとの自覚を強めるに至った。

とりわけ18世紀後半のギリシヤは、オスマン帝国からの独立の気運が高まる時期であり、文化的にも「近代ギリシヤの啓蒙期」Νεοελληνικός Διαφωτισμός(ネオエリニコス・ディアフォティズモス)ないし「近代ギリシヤ・ルネサンス」Νεοελληνική Αναγέννηση(ネオエリニキ・アナゲニスィ)といわれる時代である³⁾。

この独立運動の背景には、ギリシヤ人がトルコ支配下においても、ギリシヤ人としてのアイデンティティを失ってしまうことなく、逆に着々と固めていく幾つかの要素があった。一つは、首都コンスタンティノポリスに居住するギリシヤ人の中から、オスマン帝国の国家統治機構の中で巧みに高級官僚としてのし上がり、ファナリオティス(Φαναριώτης)と呼ばれる特権階級を形成する人々が出てきたことである。彼らは、トルコと対峙していた西欧列強諸国との間で、通訳官など外交上重要な任務を務めることとなり、そうした中でしだいに国内での政治権力を拡大させていった。

もう一つ重要な点は、西欧との対外貿易による経済の発展である。18世紀においてギリシヤ人は、バルカン半島のみならず、イタリアやフランス、ドイツ、オーストリアや南ロシアなどに、商業上の拠点を次々と開拓していき、そこでの貿易を担う商人たちはしだいに経済力をつけて市民階級を形成していくこととなった。

これらのファナリオティスら貴族階級と、富裕な商人から成る市民階級とが、互いに結びつきながら、オスマントルコに対峙できるための科学的かつ専門的な知識の習得を目指して、優秀な学生を留学生としてギリシヤ国外の西欧の地へ送り出していった。またそれとともに、商業上の拠点において、ギリシヤ語の書籍を印刷・出版する活動もしだいに高めていったのである。

ただこれらの運動は必ずしも順調に進んだわけではない。オスマン国内では、コンスタンティノポリス総主教を中心とした従来教会の権力や旧貴族階級は、トルコ上層部からの恩恵に浴してい

た面もあり、西欧文化を受け入れることに当初はかなりの警戒感を抱いていた。とりわけ、イギリスやフランスなどの西欧列強は、ギリシヤのトルコからの独立を促していくが、それは自国のバルカン半島への進出・権益を目論んでのことであった。ギリシヤは、トルコ、西欧列強、ロシアといった三者の狭間で、民族意識を高めつつも、事態はきわめて複雑に進展していった。しかしこの流れの中でギリシヤ人は、時のフランス革命の影響なども受けることで、ギリシヤ民族固有の文化遺産を再確認し、それを継承しつつ発展させようと努めることになる。

このような動きは医学界においても顕著となった。ギリシヤでは、外国との交易で経済力を蓄えた商人が奨学制度などを援助するようになり、有能な若者たちはとりわけドイツやイタリアの大学に留学し、西欧医学を学ぶ機会が増えていった。そのように西欧諸国で医学を学んだギリシヤ人医師の間で、『ヒポクラテス全集』を中心として、ガレノスやアレタイオス、ディオスコリデスなどの原典を積極的に研究する機運が高まったのである。

例えば、ギリシヤ独立運動の英雄の一人でもある、アダマンディオス・コライス(Αδαμάντιος Κοραΐς, 1748-1833)は、フランスのモンペリエ大学で医学を学び、パリで活躍した在外ギリシヤ人であった。独立運動の当初は、ギリシヤ国内よりもむしろ、このようにギリシヤ国外に在住していた知識人が啓蒙活動を牽引していった面が大きい。コライスはパリに在住し、フランス革命に大いに刺激を受けた。また彼は、古代ギリシヤの文化がヨーロッパ共通の歴史遺産として西欧各国で重視され、継承されてきたことも深く認識していた。そして自らもギリシヤ人として、ギリシヤの歴史的遺産が比類ないものであることを同胞たるギリシヤ人自身にも自覚させようとし、然るべき「教育」を施すことによってこそ、オスマントルコの支配から同胞を解放させ得るとの強い信念を持つようになった。そして、従来トルコ領となっていたギリシヤ本土では叶わなかった、ギリシヤ語辞典の編纂や、古代ギリシヤ文献の校訂、現代

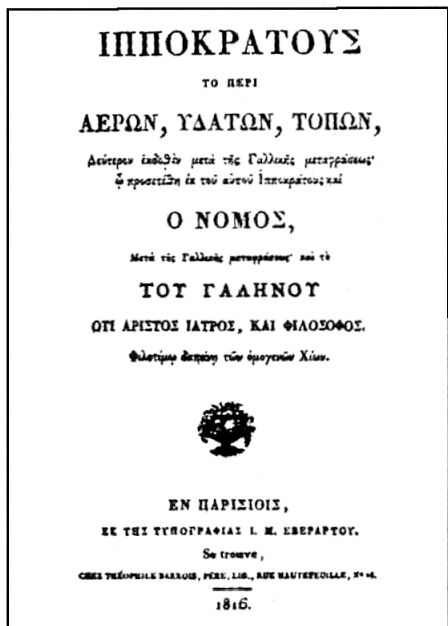


図1 アダムンディオス・コライス『空気、水、場所について』校訂本（パリ1816）

ギリシャ語への翻訳等を精力的に行なってそれらを祖国ギリシャへ送り、古典学者として名声を博したのである。

その校訂本の一つが、『ヒポクラテス全集』中の『空気・水・場所について』であった（*Ἱπποκράτους, Το περι ἀέρων, ὑδάτων, τόπων*, Paris, 1816）。コライスはこの書の冒頭に、「医学を研究する同胞（在外ギリシャ人）の若者たちへ」と題して序論を付している。そして、その中には『法』『神聖病について』『品位について』『体内風気について』『誓い』『コス派の予後』『流行病』『箴言』『疾患について』等々、『ヒポクラテス全集』中の諸著作への数多くの言及ないし抜粋が見られるのである。

また、同じコライスの手になる *Ἱατρική Φιλοσοφία*（イアトリキ・フィロソフィア 医療哲学）と題した論文においても、ヒポクラテスについての言及がみられる。それは、ヒポクラテスによって医術に哲学的な方法（*φιλοσοφική μέθοδος*）が持ち込まれたわけであるが、それはまさに分析的な哲学であり、古に形成されて以来何世紀にも亘って受け継がれており、それは人間理性を発展させる

ための道具として、役立てられてきたし、今後もし若い世代の人々に、新たな観察と帰納とを日々積み重ねていくことを通して、役立つものとなるであろう、といった主旨の記述である。コライスは、古代からのヒポクラテスの方法が、今後もより発展形態を取りながら、なお有用であり続けることを力説しているのである。

なお、こうしたギリシャ文化再興の動きが起こり始めた時期のオスマントルコは、いかなる状況にあったのであろうか⁴⁾。歴史を遡ればオスマントルコは13世紀末以降、アナトリア西北部から西方へ領土拡張を進めてきた。そして14世紀半ば以降は、西欧諸国にとって「トルコの脅威」として語られるほどの軍勢力・経済力を持つ大帝国となる。このオスマントルコの帝国内では、ギリシャ人も含めた多様な民族（イスラム教徒、キリスト教徒）が共生していた。イスラム系の人々は、アラビア医学の遺産を修得・継承していたが、そのアラビア医学には、ギリシャ・ローマの医学も多く取り入れられてきた長い歴史がある。1470年には、メフメト2世により、イスタンブールに帝国初の医学校が創設され、ヨーロッパ側からみても医学の水準は高いものがあり、オスマントルコは長らく先進的な地位を占めてきたといわれる⁵⁾。

しかしながら西欧諸国で近代医学が発展し、18世紀以降にオスマントルコの国力が衰退するのに伴って、国家政策レベルで西欧化の流れが徐々にみられるようになる。先進的な地位が逆転し、西欧の文化を後追いつることになっていくのである。1827年には、マハムード2世によって初の近代的な軍医学校が設立され、以後、帝国政府もフランスやドイツなどの医学を積極的に取り入れるようになった。

ギリシャ人は、そうしたオスマントルコ政府に先駆けて、西欧の医学を受容（いわば逆輸入）することになったのである。

2. 近代ギリシャにおける『ヒポクラテス全集』の継承

それでは具体的に、近代ギリシャの啓蒙期にはどのような活動がみられたであろうか。この時期

表1 近代ギリシャ啓蒙期 (1745-1821) における
主要医学書の出版地

出版地	冊数
ウィーン (オーストリア)	9
ヴェネツィア (イタリア)	7
ハレ (ドイツ)	4
パリ (フランス)	4
ペーチ (ハンガリー)	2
コンスタンティノポリス (オスマン帝国領)	2
ライプツィヒ (ドイツ)	1
ニージニー (ロシア)	1
ケルキラ (オスマン帝国領)	1
ヤーシ (ルーマニア)	1
計	32

※上記の中には、再版された書籍 (4冊) も含む。

には、イタリアなど他のヨーロッパ諸国の医学書のギリシャ語への翻訳書、またギリシャ人自身による医学論文や研究書が多数刊行された。これらの医学文献については、カラベロプウロスにより綿密な調査が行われている。

その結果明らかになったことは次の点である。すなわち、1745年から、ギリシャで独立戦争が始まる1821年までに、執筆・刊行された代表的なギリシャ語医学文献として28冊が挙げられていることである。表1に見られるように、そのほとんどはギリシャ国外で発刊された。この時期には、近代ギリシャ語で著された自然科学系の書籍が数多く刊行されたが、そのうちの約15%を医学書が占めていたという⁶⁾。そしてそれらの中には実に数多くの『ヒポクラテス全集』の引用ないし言及が見られるということである。その一覧を示せば表2のようになる。

表2は、近代のギリシャの医師たちが『ヒポクラテス全集』にどのような関心を抱いていたのかを検討していく上で、極めて興味深い資料といえる。この表から一見してうかがえることは、『ヒポクラテス全集』の中でも『箴言』に関する言及が多いことであるが、それ以外にもさまざまな著作からの引用が多数みられることである。近代ギ

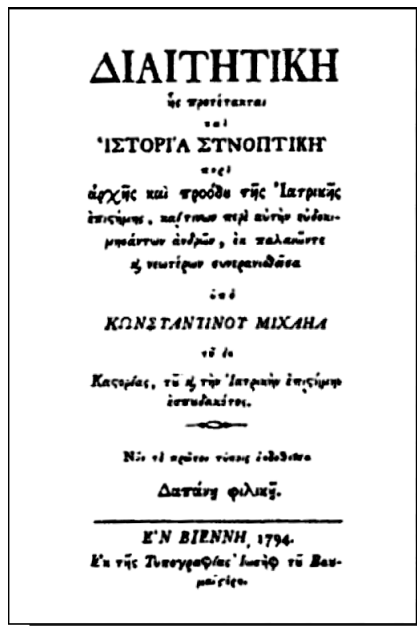


図2 コンスタンディノス・ミハイル

『食餌法について、さらに医学の始源とその発展についての歴史概観』(ウィーン 1794)

リシャにおいては、このような『ヒポクラテス全集』中の各著作のどのような点について注目されたのであろうか。

本論文では、カラベロプウロスによって調査された医療文献のうち、最も代表的なもの的一端を取り上げてみたい。

3. 近代のギリシャでは『ヒポクラテス全集』 のいかなる点が注目されたのか

(1) コンスタンディノス・ミハイル

(Κωνσταντίνος Μιχαήλ, 1751-1816)

*Διαιτητική, ης προτέτακται και Ιστορία συνοπτική
περί αρχής και προόδου της ιατρικής επιστήμης*
(Wien, 1794)

この書は、『食餌法について、さらに医学の始源とその発展についての歴史概観』というテーマであり、特に第1部は、近代ギリシャ語で記された初めての医学史として、ギリシャ医学史上、まさに記念すべき著作である。

また第2部は、近代ギリシャにおける食餌法が

表2 近代ギリシャ啓蒙期（1745-1821）の主要医学書における『ヒポクラテス全集』への言及数

	著作名	言及数	抜粋数	参照数
1	『箴言』	63	48	15
2	『古い医術について』	7	4	3
3	『流行病』	9	5	4
4	『術について』	6	4	2
5	『体内風気について』	6	3	3
6	『医師の心得』	6	4	2
7	『疾患について』	5	3	2
8	『法』	5	3	2
9	『疾病について』	4	3	1
10	『空気、水、場所について』	4	-	4
11	『神聖な病について』	4	2	2
12	『栄養について』	4	4	-
13	『急性病の摂生法について』	3	2	1
14	『書簡集』	3	3	-
15	『予後』	3	1	2
16	『食餌法について』	4	1	3
17	『品位について』	3	3	-
18	『予言』	2	2	-
19	『健康時の摂生法について』	2	1	1
20	『人間の自然性について』	2	1	1
21	『誓い』	2	1	1
22	『液体について』	1	-	1
23	『生殖について』	1	1	-
24	『人体の部位について』	2	2	-
25	『コス派の予後』	1	1	-
26	『心臓について』	1	1	-
	計	153	104	49

詳細に論じられている。ここには、『ヒポクラテス全集』所収の『食餌法について』を原型としつつ、近代特有の食材・食事（例えば、コーヒーやココア等々、古代にはなかったものや、他の西欧諸国とは異なるギリシャ独特の食材も数多く登場する）や、それによって作られる人間の体質・病気等々についての記載が見られる。古代版食餌法に対して、さながら“現代版食餌法”を目指した

書といった観を呈している。

著者のコンスタンディノス・ミハイルはマケドニア出身の医師である。彼はウィーン大学医学部に留学し、著作活動もウィーンで行なった。本書の冒頭には、ドイツ人外科医アントン・シュテルク（Anton Stoerk, 1731-1803）に対する献辞が記されている。シュテルクは、当時オーストリアの宮廷付医師であり、マリア・テレジアの侍医も務め

た人物である。彼の専門は外科であるが、薬学や毒物学についても造詣が深く、コンスタンディノス・ミハイルもウィーンに留学した際には、当時ウィーン大学医学部長であったシュテルクに師事し、その影響を大いに受けたという。

また食餌法については、リヒター (A. G. Richter, 1742-1812) の *Praisepta diaetica* に依拠している部分も大きい。ただしミハイルは、西欧での医学を摂取しつつも、決してそれらの単なる受容に終始することなく、あくまでもヒポクラテスの伝統を受け継ぐギリシャ人医師としての使命を強く感じており、西欧の医学を彼なりに咀嚼しつつ、古代から近代までのギリシャの社会的伝統をふまえた医学史及び食餌法を著したのであった。本書の目次の項目も興味深いものがあるため、近代ギリシャ語から訳して以下に記す。

コンスタンディノス・ミハイル

『食餌法について、さらに医学の始源とその発展についての歴史概観』

一目次一

アントン・シュテルク男爵への献辞 (ラテン語・ギリシャ語の2ヶ国語で)

歴史概観 古代からの医術、及び優れた業績を挙げた医師たちの発展史

健康な食事を述べるに際しての、食餌法についての教え

序文

空気とその変化について、風について

食物の栄養について

肉類について、鳥類について

魚介類その他の海産物について

豆類について、野菜について、果物について

誰もが気を配らなければならない、食材の原則について

アルコール飲料について

ワイン、ラキ酒について、ビールについて

温かい飲み物について

紅茶について、コーヒーについて

ニコチン、すなわちタバコについて

睡眠と不眠症について

運動と休養について

精神的苦痛について

心の病について

悲しみについて、怒りについて、嫉妬について

恐怖について、驚きについて、

喜び、楽しさ、嬉しさ、歓喜について、笑いについて

痲癩について、愛情について

身体から排出するもの、下腹部から排泄するものについて

尿について、不明瞭な分泌物について

発汗について、唾液について

射精と性交について、自慰について

入浴について

瀉血について、下剤について

参考文献

本書で着目すべき特徴の一つは、ミハイルが食餌法その他医療全般を説く際に、『ヒポクラテス全集』の『食餌法について』第1巻に依拠している点である。すなわち、医師は生活の糧であるすべての飲食物について知らなければならず、運動と食物量や体質や年齢との関係、一年の気候との関係についても知らなければならない。さらに病気は突如として人間をおそうのではなく、徐々に進行した上で急激に現れる。体内で健康なものが病性のものに支配される前にはどのような症状を呈するか、そしてそれをどのようにして健康状態へ戻すべきかを考えるヒポクラテスの立場を、ミハイルもまた自らの基本姿勢とする。すなわち彼は、人間の心身が生活(食事・運動・自然環境など)の中で創られていく過程に着目した。そしてそれがどのように病気になっていくのかの過程性を見極めることを説くヒポクラテスの視点を何よりも重視し、それを(古代より生活も病気も複雑化しているとはいえ)現代においてもなお継承しようと努めたのである。

(2) ヨアンニス・ニコリディス

(Ιωάννης Νικολίδης, ca.1745–1829)

Ερμηνεία περί του πώς πρέπει να θεραπεύεται το γαλλικόν πάθος ήγουν η μαλαφράντζα (Wien, 1794) 『性病すなわち梅毒をどのように治療すべきかについての解説』

ニコリディスはマケドニア出身の医師であり、彼もまたコンスタンディノス・ミハイルと同様にウィーンに留学して研究及び著作活動を行なった。先述したアントン・シュテルクの指導下で、1780年に博士論文 (*Dissertatio Inauguralis Physiologico-Medica Sistens Pygoniam quam annuente in clyta facultate Medica*) を執筆し、医学博士を取得している。また、ニコリディスは師シュテルクの外科学に関する著作の、ドイツ語からのラテン語訳も手がけた (*Praecepta Medico-Practica in usum Chiurgosum constrensium et ruralium Ditionum Austrariacarum*, Wien, 1791)。この書は、オーストリア帝国軍の野営地などでの外科治療のために書かれた実践指南書である。

ニコリディスは、シュテルクの下で幅広い研究を手がけたが、とりわけ上記の、1794年に出版した梅毒の治療法についての書は、近代ギリシャでの性病についての最初の著作として重要である。彼はこの書の冒頭で、「本書は、ギリシャ民族に共通の利益をもたらすために著したものであり、私の目的が正しく遂行されるべく、すべてのギリシャ人が理解できるように、平易な現代ギリシャ語で記すことを心掛けた」と述べている。

この中でニコリディスは、『ヒポクラテス全集』の『疾患について』の冒頭箇所を、古代ギリシャ語原典とともに、近代ギリシャ語訳をつけて抜粋している。

当時のギリシャにおいても、他のヨーロッパ諸国と同様に、梅毒は感染力の強い伝染病として社会問題化していた。いまだ病原菌の特定もなされず、確たる治療法も創られていない時代ではあった。

しかしここで着目すべきは次の点である。すなわち、同じように梅毒に罹患しうる環境にあっ

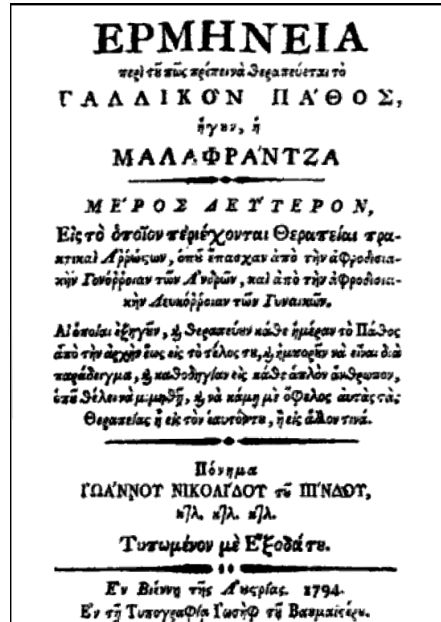


図3 ヨアンニス・ニコリディス

『性病すなわち梅毒をどのように治療すべきかについての解説』(ウィーン1794)

ても、人によってはその感染の程度に差異があり、また罹患後の進行状況についても、必ずしも全ての患者が同様の過程を辿るわけではなく、人によってかなりの差異がある。ニコリディスはこの点を認めつつ、その原因を次のように検証する。

個々人の感染症状の差異は、その人間がそれまでの生活過程(食生活その他)で培ってきたところの、いわゆる自然治癒力の強弱、そしてその時々体の状態(疲労度その他)如何によって現れてくる。梅毒は当時の恐るべき感染症ではあっても、その対処法として他の疾病と根本的には共通するものがあることをニコリディスは注意深く見て取り、そのことを『ヒポクラテス全集』を抛り所としつつ、示唆しようとしたものと考えられる。

(3) キリコス・ヒェレティス

(Κήρυκος Χαιρέτης, 1756–1830)

Εγχειρίδιον της των ζώων οικονομίας (Venice, 1798) 『動物体の秩序についての手引』

ヒェレティスはクレタ出身の医師である。彼はヨアンネス・カポディストリアスと共にイタリアのパドヴァで医学を学んだ後、首都コンスタンティノポリスにてオスマン帝国君主スルタンの侍医を務めた人物である。

なおカポディストリアスといえば、彼は後に、ギリシャ独立後、初代大統領に就任することになる、ギリシャ史上極めて重要な人物である⁷⁾。彼はパドヴァ大学で外科を学んだことで知られる。医学の知識があったカポディストリアスは後年、ギリシャ農民など貧しい人々の診療にも偏見なく携わったという。

将来のギリシャを担う知的エリートの一として、ヒェレティスもまたギリシャ国外へ留学して啓蒙思想に触れ、古代の遺産を再認識させられたのであった。パドヴァ大学では、古代最大の哲学者アリストテレスが最も尊敬されており、近代に至るも医学界では依然としてヒポクラテスやガレノスへの尊崇の念も高かったことから、ヒェレティスはギリシャ人医師としての誇りを非常に強く感じたといわれる。

本書は、近代においてギリシャ語で執筆された最初の生理学書であり、第1章では呼吸器、第2章で消化器、第3章では血液循環について論じている。

特に第3章では、『箴言』2.11、『流行病』第2巻、11などを援用しつつ、「医学の父として偉大なるヒポクラテス、及び卓越した医師ガレノスは、熱病の患者にはまず水を処方した」と記され、水のもつ普遍薬としての性質について述べていることが特徴である。

結 論

近代ギリシャの啓蒙期（ギリシャ独立戦争勃発前の70年間）は、ギリシャ人が西欧から学ぶことを通して、古代ギリシャ医学の継承者としての



図4 キリコス・ヒェレティス『動物体の秩序についての手引』（ヴェネツィア 1798）

自覚を高め、在外ギリシャ人自身の手で多数の医学書が執筆・刊行され始めたという点で、ギリシャ史上極めて重要な時期である。いずれの医学書も、ギリシャの同胞に対して民族意識を鼓舞させつつ、理解しやすい近代ギリシャ語で記された点が特徴である。そしてそれらの医学書には、『ヒポクラテス全集』を初めとする多数の古代ギリシャ医療についての言及・抜粋が記されている。『ヒポクラテス全集』諸著作については、単なる歴史書としてではなく、当時のギリシャ社会で生じていた病気等に対処するための医療実践の基本指針を示す拠り所として用いられていたことがうかがえる。

本研究では、近代ギリシャの医療について、『ヒポクラテス全集』の継承という点に着目して、その一端を紹介した。今後は、近代ギリシャの社会的状況についての理解をより深めつつ、当時のギリシャ人医師たちの問題意識や医学史に対する考え方等を、当時刊行された医学文献の内容に即して具体的に検証していきたいと考える。

注

- 1) カラベロプウロス博士は、古代ギリシャから近代ギリシャにかけての医学史について幅広い研究を行っており、ギリシャ医学史学会の第一人者である。博士の専門は小児科であり、ギリシャ小児医療史学会の会長を務め、ヒポクラテスやガレノス等における小児医療についての学会発表及び論文を多数執筆している。その他、小児科の分野にとどまらず、『ガレノス全集目録』(*Γαλήνου Άπαντα, Οι Τίτλοι των Έργων κατά Τόμους και Ευρετήριο των Τίτλων*, Αθήνα, 1998) 作成を行なう等、古代医学史全般についての強い関心を持っている。また、とりわけギリシャ独立戦争前後の近代医療文献の発掘・調査を精力的に進めている。カラベロプウロス博士による近代ギリシャ医療史の広範な研究は、アテネ大学にて医学史博士論文としてまとめられ、2003年に刊行された。本書は、極めて浩瀚な研究書であり、近代ギリシャ医療史を知るための重要な資料を提供している。Δ. Καραμπερόπουλος, *Η Ιατρική Ευρωπαϊκή Γνώση στον Ελληνικό Χώρο 1745–1821 (The Medical European Knowledge in the Greek Region 1745–1821)*, Athens, 2003, また特に、その中の『ヒポクラテス全集』の受容に焦点を当てた研究論文としては以下のものがある。Ο Ιπποκράτης στα ιατρικά κείμενα του Νεοελληνικού Διαφωτισμού, 2006.
- 2) ギリシャ人の中でも有能な人材は政府高官に登用されたり、あるいは自ら仕官する道があったが、その場合多くはギリシャ正教からイスラム教に改宗することを義務づけられた。たとえばトルコ軍の精鋭部隊であるイエニチェリ軍団は、キリスト教徒の子弟から徴発されたが、彼らもイスラム教に改宗された。
- 3) 近代ギリシャの歴史については、ギリシャ歴史学の大家であるコンスタンディノス・パパリゴプウロスによる『ギリシャ国民の歴史』がある。ギリシャ歴史学界を代表する大著である。(Κωνσταντίνου Παπαρρηγοπούλου *Ιστορία του Ελληνικού Έθνους*, 1860–1872) その他、邦訳文献としては、C.M. ウッドハウス。近代ギリシア史。西村六郎訳。みすず書房。1997があり、4世紀から現代まで広範囲に扱っている。また、N. スボロノフ。近代ギリシア史。西村六郎訳。白水社。1988, R. クロッグ。ギリシャ近現代史。新評論。1998などに簡潔にまとめられている。
- 4) オスマントルコと西欧との関係については、以下の書を参照。新井政美。オスマン vs. ヨーロッパ〈トルコの脅威〉とは何だったのか。講談社。2002。
- 5) オスマントルコの医学については、次の論文を参照。N. Sari, “Educating the Ottoman Physician”, *History of Medicine Studies*, Istanbul, 1988, pp. 40–64.
- 6) Δ. Καραμπερόπουλος, «Η αποδοχή της ευρωπαϊκής ιατρικής επιστήμης μέσω των ελληνικών βιβλίων της προεπαναστατικής περιόδου, Αθήνα» 1998.
- 7) カポディストリアスと彼を取り巻く社会的状況について取り扱ったものとして以下の書がある。阿部重雄。ギリシア独立とカポディストリアス。刀水書房。2001。

The Succession of the Hippocratic Corpus in Modern Greece

Yukiko SUGANO, Katsuya HONDA

University of Tsukuba Graduate School of Comprehensive Human Sciences,
Department of Legal Medicine

This paper examines how the *Hippocratic corpus* was passed on during the Enlightenment of modern Greece, introducing part of the latest Greek research on the history of medicine. Although classical studies at large had stagnated at the time under the rule of the Ottoman Empire, with the movement toward independence in the second half of the 18th century the Greeks raised their consciousness of the fact that they were the successors to their ancestral great achievements. From that time classical studies, including the history of medicine, had been activated. From some medical dissertations and books written by Greek doctors or researchers of those days, we will recognize that they made efforts to deepen the substance of modern Greek medicine, seeking the principles of medical practice from the ancient heritage.

Key words: Hippocratic corpus, Enlightenment of modern Greece, Modern Greek medicine